

イヌの肛門部メラノサイト腫瘍の病理学的悪性度と予後

【背景】イヌのメラノサイト腫瘍の多くは口腔内や爪床部、眼、皮膚にみられ、発生する解剖学的位置によってその腫瘍動態が明らかに異なり、口腔内や爪床部のメラノサイト腫瘍は悪性の挙動を示す。肛門部におけるメラノサイト腫瘍は非常に稀であり、強い局所浸潤および遠隔転移を伴う症例が数例報告されているが、その病理学的特徴と予後に関する報告は乏しい。本研究では、肛門部メラノサイト腫瘍の病理学的悪性度を評価し、予後との関連性について検討した。【材料と方法】肛門部におけるイヌのメラノサイト腫瘍 16 例を用い、組織学的に組織型、核の多形性、核分裂像の数 (/10HPF)、メラニン顆粒含有細胞率、浸潤性の有無について評価し、悪性黒色腫と黒色細胞腫に分類した。また抗 Ki-67 抗体を用いた免疫染色により陽性細胞率 (腫瘍細胞 500 個) を計測し、組織学的悪性度および Ki-67 陽性率と生存期間の相関について統計学的に検討した。【結果】組織型は polygonal、spindle あるいは両者の混合型がみられ、混合型が半数を占め、その多くは強い核の多形性を示した。核分裂像の数は平均 29 個/10HPF (0~75 個) で、核の多形性および浸潤性と概ね相関し、メラニン顆粒含有細胞率とは関連しなかった。これらの組織学的悪性度から、悪性黒色腫 13 例、黒色細胞腫 3 例に分類した。Ki-67 陽性率は特に核分裂像の数と強く相関した。生存期間中央値は悪性黒色腫が 264 日 (72~701 日)、黒色細胞腫が 567 日 (546~588 日) で、悪性黒色腫の方が生存期間は短く、生存期間と核の多形性、核分裂像の数、浸潤性、Ki-67 陽性率の間に有意な相関が認められた ($P < 0.05$)。【考察】イヌの肛門部メラノサイト腫瘍は悪性の組織所見および臨床転帰を示すものが多く、肛門部は口腔内と同様に経過に注意が必要な発生部位であると考えられた。また悪性度評価において、特に核の多形性、核分裂像の数、浸潤性、Ki-67 陽性率は有用な予後因子であることが示された。